

受託団体名	NPO 法人翔和学園
-------	------------

事業実績報告書

(1) 本事業の実施時期

実施時期	実施内容	備考
令和元年 6 月 13 日	■企画検討会議	
令和元年 7 月 2 日	■特別支援教育・感覚統合研究会①	参加者：20 名
令和元年 7 月 11 日	■企画検討会議	
令和元年 8 月 2 日	■特別支援教育・感覚統合研究会②	参加者：20 名
令和元年 8 月 24 日	■公開研修会・公開事例検討会	参加者：100 名
令和元年 10 月 4 日	■特別支援教育・感覚統合研究会③	参加者：20 名
令和元年 10 月 18 日	■協力校への ipad 貸与開始	
令和元年 11 月 6 日	■企画検討会議	
令和元年 12 月 6 日	■特別支援教育・感覚統合研究会④	参加者：20 名
令和 2 年 1 月 18 日	■公開研修会・公開事例検討会	参加者：78 名
令和 2 年 1 月 20 日	■Web システムによる事例検討	
令和元年 2 月 7 日	■特別支援教育・感覚統合研究会⑤	参加者：20 名

(2) 事業の実績の説明

①本事業の趣旨

■ 1. 事業の目標

- ① 「学習の個別最適化」の方略として「感覚統合」の視点が必須であることについて広く理解・啓発を行う
- ② 事例検討などの仕組みを通じて教職員の資質向上を図る。
- ③ ①②の実績に基づき、公立学校普通学級において作業療法士等の身体の専門家と連携した教育を行う

■ 2. 事業の背景

「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(中教審教育課程部会) 小中学校時代は「学びの基盤」を固める時期であると述べられている。そして、基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力を身につけるために「学習の個別最適化」が必要であり、そのために AI を活用した ICT 教材の利用が推奨されている。

一方で、『教育者は、読み、書き、算数のことをよく「基礎」というけれど実際には、それは感覚統合のしっかりした基礎があって初めて発達可能な、非常に複雑なプロセスなのである。』(A. Jean. Ayres 「子どもの発達と感覚統合」) と言われるように、読解力や思考力などの力は「感覚統合」という土台があって初めて習得できるものであるとされている。

翔和学園では、2014 年から高 IQ (120 以上) の発達障害児に特化したフリースクール (アカデミック・ギフテッド・クラス、以下 AGC) を運営している。AGC で学ぶ生徒は全員、作業療法士 (感覚統合セラピスト有資格者) によるアセスメントを実施しているが、エアーズの言うところの「感覚統合のしっかりとした基礎」がない状態である。そのため、Qubena などの AI 型 ICT 教材を活用しているものの、「タブレットを持って学習する」という時間を十分にとるのが困難な状態である。

つまり、「学びの基盤」を固めるためには、エアーズが言うところの「感覚統合のしっかりした基礎」を発達させることも、必要不可欠であるといえる。

また、AI の分野では、「人工知能」と「身体性」ということが今なお議論されている。感情など人間に特有とされる機能も機械学習による学習が可能であるという立場もある一方で、人間特有の

「身体性」を活かす事で学習が効率化されるのではないかという仮説も立てられている。(長谷川眞理子／松尾豊「知能と進化～知能と身体性は不可分なのか?～」10mTV オピニオンより)

以上のようなことから、特に外遊び等が減少している現代においては、子ども一人ひとりの「学びの基盤」を固めるための個別最適化の視点として、感覚統合の視点が不可欠であると考える。

②実施内容の概要

(1) 研修会を通じた理解・啓発を進める

- ①本事業の一環として翔和学園が主催した研修会において、子どもの困り感に対して感覚・運動機能の面からアプローチする重要性についての基調講演・事例検討を行った
- ②市区町村の教育委員会主催の教員研修会にて、本事業についての説明ならびに感覚・運動機能の面からアプローチした翔和学園のケーススタディについて事例報告を行うとともに、通常学級で行うことのできる支援プログラムを学級担任に提案した。

(2) 研究会を通じて教員の資質向上を図る

公立小中学校教員と合同で研究会を開催し、以下のことを行った。

- ①感覚・運動機能の発達に関する共通テキストの講読
- ②感覚・運動機能の発達の専門家による毎回40分程度の講義受講
- ③事例をまとめるための共通フォーマットの作成
- ④上記①～③にもとづく事例検討と介入後の成果報告

(3) Webシステムを活用した事例検討

- ①公立の小学校教諭に専用の端末を貸与し、書字場面と歩行場面の動画撮影を依頼した
- ②Webシステムを活用し、専門家と協働で、書字場面と歩行場面の事例検討を行った
- ③事例検討を通じて対象児に必要な感覚・運動面の支援方法を共有するとともに、効果の検証を行った

③実施成果の概要

(1) 研修会を通じて理解・啓発を進める

- ①翔和学園主催の研修会には合計180名が参加し、半数以上の参加者が「感覚統合の視点を日々の実践に取り入れたい」と回答した
- ②研修会参加者には以下の資料を配布し、現場での実践に活用していただくよう依頼した
 - a.『子どもの育ちを応援する“作業療法士の視点”～学童期編―座れない子どもたち―』(一社 奈良県作業療法士会 特別支援教育委員会制作)
 - b.『人間発達学』(福田恵美子著)所収の「発達里程標」
 - c.事例検討シート(本事業において作成)
- ②地区町村教育委員会主催の研修会では、練馬区や三鷹市などで講演・実践発表の機会があった

(2) 研究会を通じて教員の資質向上を図る

- ①年に5回の研究会を開催することができた。(34名が研究会に登録)
- ②それぞれの参加者が研究会で専門家の助言を受けたうえで、各自の勤務校において「感覚統合」の視点に基づいた実践を行うことができた
- ③参加者からは以下のような感想が得られた

- a. 所定のフォーマットで事例をまとめることで、子どもの実態を同僚と共有しやすくなった
- b. 専門家がどのように子どもの発達段階を看取るのか、具体的に知ることができた
- c. 今まで感覚的に行ってきた指導方法について、科学的根拠に基づいて検証することができた
- d. 勤務校学校区の特別支援教育部会で、研究会での学びを活かした事例検討ができた

(3) Webシステムを活用した事例検討

- ① 公立小学校5校の協力を得て、10例の事例を検討することができた
- ② 協力校の教員からは「知りたいと思ったことについてリアルタイムにコメントをもらえるので、日々の実践に活かしやすかった」というような感想が得られた

④課題と今後の方策

(1) 研修会を通じて理解・啓発を進める

【課題】 感覚統合の視点で子どもの感覚・運動機能の発達を看取ることが重要であることについては周知することができたが、子どもの実態に応じた具体的な対応については学びを深めることができなかった。

【方策】 遊びや当番活動、または音楽や体育など、日常的な学校生活の中には感覚・運動機能の発達を促すことのできる要素が溢れていることなどを分かりやすく解説し、周知する。

(2) 研究会を通じて教員の資質向上を図る

【課題】 感覚・運動機能の発達について検討するうえで、成育歴に関する情報等、必要不可欠な情報がある。その一方で、個人情報在校外に持ち出すことが困難であり、十分な情報がない中で専門家に見立てを依頼せざるを得ないという課題があった。

【方策】 協力校を対象とした保護者向けの講演会等を行うことで、保護者にも研究会の趣旨を理解していただき、個人情報利用の同意を得やすいような環境を整える。

(3) Webシステムを活用した事例検討

【課題】 事例の数も少なく、かつ、どのような児童・生徒を対象にどのような場面の動画を撮影するかということについて条件を統一しなかったため、事例検討で得られた知見を一般化していくことができなかった

【方策】 今回は研究会参加者の勤務校に限定して協力を依頼した。研修会参加者の勤務校にも協力を呼び掛けることで、事例数を増やしていくことができる。

⑤実施体制

事業担当者（団体）組織、協力者（メンバー、団体等）の氏名等

氏名（団体名）	勤務先・職名	本事業における役割
伊藤寛晃	翔和学園	学園長
大場龍男		相談役
石川裕美		相談役
南茉莉		総務
中村朋彦		教務
柏田良男		教務
遠藤皇徳		作業療法士
宮尾益知		どんぐり発達クリニック・院長 NPO法人ギフトド研究所・理事長
福田恵美子	長野保健医療大学・教授 NPO法人小山こども発達支援センターリズム園・顧問	企画検討委員 事例検討会スーパーバイズ
青柳政則	東京小児療育病院・作業療法士	企画検討委員・事例検討委員 翔和学園での事例研究
高橋佑侍	株式会社 J A R T A international 認定トレーナー・理学療法士	企画検討委員・事例検討委員 翔和学園での事例研究
関根朋子	北区立荒川小学校・教諭	企画検討委員・事例検討委員
鈴木恭子	相模原市立大島小学校 教諭・児童支援専任	企画検討委員・事例検討委員
小林直樹	躰道館 主席師範	武術特別講師
中越正美	フリーランス	音楽特別講師
朝田晃治	有限会社 朝田	基礎データ収集、事例検討のためのwebシステムの構築